

◆ ハーンのまなざし ◆

1月も、はや最終週。ついこの間新しい年が始まったばかりだというのに、学校は年度末に向け正確に時を刻む。しかしながら、相変わらず厳しい状況が続いている。



こんな閉塞感が少しでも軽くならないかと、『明治日本の面影』（小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)著 平川祐弘編，講談社学術文庫（1990）。当初、自身により『知られぬ日本の面影』と名付けられた）を読み返してみる。

最後の方にある『ひまわり』。文庫本でたった6ページの小論。後で知ったことだけれど、元々はあの『怪談』の最後に収められていたとのこと。子どもの頃の思い出を、ひまわり（sunflower）の花を見ながら回想するという内容。幾層もの精神的な地層が横たわっているように感じられるが、冒頭、「妖精の輪（フェアリー・リング）を探している」という記述はノスタルジックでもある。

そして『日本人の微笑』。この中でハーンは、日本人の微笑について「このような、およそ説明しがたい日本人の微笑の秘密を解く鍵は日本人の礼儀正しさにあ」り、さらに「その微笑が象徴する感情は日本の礼儀作法全般にあまねく行き渡っている。」と書いている。彼の年譜を調べると、日本に赴く前、様々な国々を巡ってきたことがわかるが、そういった彼の視点から捉えた我が国の有り様はこのように記述されている。

また、この小論には、「京都の小さなお寺の門前にあるお地藏様」を見に行つた際に出会った幼子の無心の微笑と、そのお地藏様の微笑との類似についても触れられている。そして最後に「日本の若い世代が軽蔑すべきものとみなしている自国の過去へ、日本人が将来振り返る日が必ず来るであろう。（中略）その神々の微笑はかつては日本人自身の似顔絵であり、その日本人自身の微笑でもあったのだから。」と結ばれる。何とも心が温かくなる。

このメッセージで、かつて勤務していた学校で担任をしていた頃、毎日遣り取りをする学級日誌の中で「[路傍の花](#)」について触れてくれた生徒のコメントを紹介した。通学途中の道すがら、ふと目にした花の美しさに目をとめる感性。ハーンの記述と共鳴する部分を感じる。

こういう時だからこそ、心温まる物事に敏感でありたいと思う。